

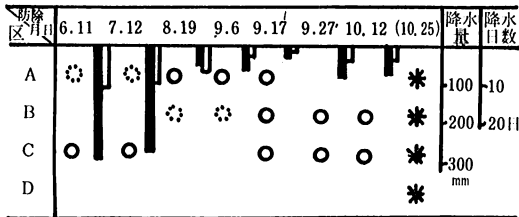
### カキ炭そ病の果実における感染時期と発病との関係

野口保弘・\*宮原 実  
(福岡県園芸試験場・\*福岡県農試豊前分場)

カキの炭そ病の果実の発病をほ場で観察すると、初発病は6月頃からみられ、9月以後の収穫前頃に発病が多い。梅雨期と秋季とを比較すると、秋の収穫前に発病の増加が多い傾向がみられ、幼果期よりも成熟が進むにつれて感染し発病しやすくなるものと推察されたので、感染時期と発病との関係を調査した。

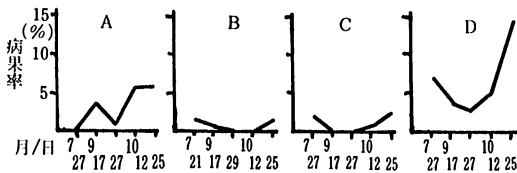
#### 1. 防除時期と発病との関係

1974年、富有の成木を供試し、防除時期の相違と発病との関係を調査した。重点防除時期にはラピライト 500倍を、補足防除時期にはキノンドー800倍を散布した。その結果、9～10月に重点防除した区の10月最後の発病率は約2%であったが、8～9月に重点防除した区は約6%を示し、やや多かった。



注) ○印は重点防除時期、⊙印は補足防除時期を示す  
\*印は最終調査を示す  
■ 降水量    ≡ 降水日数(1mm以上)

第1図 カキ炭そ病の防除時期と発病との関係試験における試験区設計



第2図 カキ炭そ病の防除時期と果実発病との関係

#### 2. 樹上果に病枝を吊るした場合の果実の感染と発病との関係

'77年、富有の樹上果を供試し、梅雨期から着色期にかけて、時期毎に長さ約3cmの病枝を1果に1本あて吊るし、降雨感染による発病状況を調査した。

その結果、病枝を吊るしてから発病までの間の降水量は、時期によってかなり変動がみられるが、最少降水量は約50mmであった。同様に、最少降水日数も時期によって変動がみられたが、夏季までは約5日、着色期頃では1～3日であった。

第1表 カキ炭そ病のほ場における感染時期と発病との関係

接種時期	接種月日	調査月日	A (日)	B (mm)	C (日)	発病率(%)	病徴
梅雨期	52. 6.23	52. 7.1	8	69.1	7	22.2	小黒点状病斑(初期病斑)
"	7.4	7.28	24	129.9	8	33.3	" ( " )
"	7.15	7.28	13	51.5	5	10.0	" ( " )
夏期	8.19	9.3	15	91.1	5	38.5	" ( " )
夏～秋期	9.2	10.11	39	101.2	10	76.9	円形大型病斑
秋期	9.16	10.11	25	83.4	7	55.6	小円形病斑
着色期	9.26	10.11	15	55.9	3	19.0	小黒点状病斑(初期病斑)
着色始期	10.13	11.4	22	47.1	1	5.0	" ( " )

注) A : 吊るし～発病までの期間, B : 吊るし～発病までの降水量(mm), C : 吊るし～発病までの降水日数(1mm以上)

#### 3. 採取果実に接種した場合の果実の感染と発病との関係

'77年、富有の採取果実を供試し、梅雨期から着色期にかけて、時期ごとに炭そ病菌の胞子懸濁液を脱脂綿貼りつけ法により接種し、25℃の温室におさめ発病までの潜伏期間を調査した。その結果、梅雨期から夏季までは約7日であったが、秋から着色始期にかけては3～4日と果実の成熟が進むにともない潜伏期間は短くなった。

これらのことから、カキの果実は成熟が進むのともない、炭そ病菌に対する感受性が高まり、感染し発病しやすくなるものと思われた。

第2表 カキ炭そ病の果実に対する接種時期と潜伏期間との関係 (温度25℃)

接種時期	接種月日	初発病時期	発病果率 %	潜伏期間 日	備考
梅雨期	52. 6.24	-	0	H	全果腐敗 果径25～30mm
"	7.4	7.11	18.2	7	" 35～45mm
梅雨明後	7.21	7.27	30.0	6	" 50～55mm
夏期	8.19	8.26	18.2	7	" 55～65mm
秋期	9.16	9.20	20.0	4	" 65mm内外
着色始期	10.14	10.17	16.7	3	病徴はうすい小斑点 " 65mm内外